

専門高校での進路選択とキャリア発達 —工業高校生を対象とした縦断的調査から—

花井 洋子・清水 和秋

はじめに

高校生のキャリア選択については、一人一社という就職慣行が見直されるなかで学校経由の就職システムが揺らぎ、生徒の希望や主体性を尊重するようにその指導の展開がシフトしてきている（望月, 2007）。この動きは、就職を選択した新卒高校生の就職後の早期離職率が減少することを期待してのものであったが、依然として離職率は5割近くを推移している状況にある。また、キャリア選択・決定を先送りし、未決定のままの卒業や消極的理由で上級学校へ進学する生徒もみられる（苅谷・濱中・大島・林・千葉, 2003）。このような状況を改善することを目的として、高校においても早い段階から、キャリア教育やインターンシップ等を通して、生徒に明確な目標を持ち、主体的な進路選択を促すような支援が導入されている（日本キャリア教育学会, 2008）。

職業的スキルの習得を中心とした専門高校では、普通科高校と比べて、現在においても、学校経由の就職システムが機能している（本田, 2009）。藤原（2010）は、高校3年間で5回の調査から、専門高校の就職希望者の率が安定して高く推移し、1年生初めに12%ほどいた未決定者も3年生初めには、2.5%以下に減少していくことを明らかにし、縦断的調査からも一貫して非進学を選ぶパターンが多いことを報告している。しかし、専門高校においても、近年、大学や専門学校への進学率が上昇し、就職希望から進学へ切り換えるなど進路が多様化し、「学校から仕事への移行」が先延ばしされる傾向にある（寺田, 2009; 中村, 2008）。また、3年生になると未決定者が減少するが、進路決定時期が近づくとフリーター希望者が増加するという現象も、普通科よりは少ないが、商業科のような専門高校でみられることが報告されている（岩田, 2010）。さらに、入学時に注目した研究では、高校教育や専門教育への動機づけをもたない生徒が不本意入学として専門高校に入学するという事態も指摘されている（酒井, 2007）。このような専門高校生の現状を改善するには、入学時から将来のキャリア選択を指導の視野において学校に

よる支援が必要である。

本研究では、支援を実際に展開するための基礎的な資料を専門高校の1年次から3年次にわたる進路決定状況の変化とキャリアについての自己効力感や意思決定との関係に求めてみることにする。ここでは横断的な比較ではなく、1年次から一人ひとりの生徒のキャリア発達を縦断的に追跡していくこととする。すなわち、1年次での進学、就職、あるいは未決定という選択が、その後3年間でどのように変化するのか、そして、この変化とキャリア自己効力感やキャリア不決断の傾向との関係を検討することによって、未決定にある生徒へのキャリア発達支援に役立つ資料を探求してみたい。この未決定（undecided）と不決断（indecision）とが、混在して、キャリア関連の研究では使用されることがある。決定することへの不安感など感じることにより決めることができない心理的な傾向については、後者の不決断が使われる（清水, 1983; 浦上, 1995）。これに加えて、パーソナリティ特性との関係をより強調する場合には優柔不断（indecisiveness）が使われることもある（清水・花井, 2008）。ここでは、進路選択状況の変化に焦点を当てるために、未決定という用語を使うこととする。

キャリアの発達の様相をとらえる尺度として、本研究では、進路選択への自信を示す自己効力感尺度と、進路の意思決定が困難な状態を測定する不決断尺度を取り上げることにする。高校生用の進路選択に対する自己効力感は、浦上（1993）の1次元の尺度に始まり、効力感を感じることのできない進路の選択に関する領域をより詳細に検討することも行われている（富永, 2008）。支援の場で活用することを目的として、花井（2007, 2008）は、キャリア選択自己効力感が多次元構造であることを明らかにしている。大学生を対象にして検討された、自己評価や目標選択に始まり、情報収集や計画立案を経て主体的な意思決定へ至るメカニズムの仮説的モデルは、専門高校生でも適用可能であることが報告されている（花井, 2011; 花井・清水・宮坂・松下, 2009; 清水, 2011）。なお、このような自己効力感は、学年とともに

高まっていくことが横断的研究から報告されている（大谷, 2003 など）。

進路の意思決定が困難な心理的傾向性についても、多次元的にとらえようとする尺度が高校生を対象に開発されている（清水・坂柳, 1988; 長須, 1994）。その後、清水・花井（2007, 2008）は、大学生を対象として、不決断から逃避やモラトリアムに至る多次元的因子構造のキャリア意思決定モデルと尺度を開発している。この尺度に関して、専門高校生を対象として、多次元構造と信頼性や妥当性が報告されている（清水・花井, 2008; 花井・清水, 2009）。

本研究では、キャリア選択における自己効力感と意思決定の心理的傾向とを 2 つの尺度によって、1 年次から 3 年次までの 3 回、縦断的に調査を行う。そして、1 年次での進路決定状況を手がかりとして、その後のキャリア支援やキャリア教育の展開に、進路決定状況へ配慮することの重要を明らかにしてみたい。

1. 方法

調査対象者：調査対象者：2007 年から 2010 年にかけて、工業高校で 8 月末のキャリア教育前に調査を実施した。3 回全てに回答した 2007 年入学生徒 135 名（うち女子 1 名）と 2008 年入学生徒 151 名（うち女子 1 名）の 286 名を対象とした。1 回目の調査時の平均年齢（SD）は、それぞれ、15.36 歳(.511)、15.42 歳(.509) であった。

質問紙：自己効力感については、花井（2008）の 25 項目からなるキャリア選択自己効力感尺度（以下、自己効力感と略す）を用いた。これらは、自己評価・目標選択・計画立案・情報収集・意思決定の主体性度の 5 下位尺度からなり、その行動への自信の度合いを測定する。 α 係数による信頼性の値は、大学生のデータで、最も低い尺度で .84（情報収集）であり、最大は .90（自己評価）である。すなわち、十分な信頼性のレベルにあると判断することができる（花井, 2008）。各下位尺度は、4 件法の 5 項目で構成されており、『自己評価』は「自分の性格を理解すること」「自分の得手・不得手を理解すること」、『目標選択』は、「将来、なりたい自分を明確にすること」「今後の人生で、自分が何をやりたいのかを明確にすること」、『計画立案』は、「進路目標を達成するために、計画を立てること」「就職活動について具体的な計画を立てること」、『情報収集』は、「自分が就きたい職業の採用状況に関する情報を入手すること」「興味ある職業分野の会社や組織に関する情報を入手すること」、『意思決定の主体性度』では、「自分で決めた志望職業を実現するために意志を貫くこと」「志望職業に就

くために粘り強く頑張ること」などの項目からなっている（詳細は、花井（2008）を参照）。

意思決定尺度については、清水・花井（2008）の 35 項目のキャリア意思決定尺度（以下、意思決定と略す）を用いた。これらは、不決断・決定不安・障害不安・葛藤・相談希求・逃避・モラトリアムの 7 下位尺度からなり、意思決定の困難さの度合いを測定する。 α 係数は、大学生のデータで、.75（障害不安）から .91（決定不安）となることから、充分な信頼性があるといえる（清水・花井, 2007）。各尺度は 4 件法の 5 項目で構成されており、7 つの下位尺度は、次の通りである。『不決断』は、「自分の能力や適性がよく分からないので、将来の職業が決まらない」「どのようにして職業を決めればよいか漠然としていて分からない」、『決定不安』は、「将来、職業を決めることがうまくいくかどうか不安である」「将来の職業のことを考えると気が滅入ってくる」、『障害不安』は、「何かの影響で希望する職業につくことができなくなるのではないかと心配になる」「具体的な将来の職業を考えているが、採用試験が心配である」、『葛藤』は、「いろいろ考えすぎて、どの職業を選べばよいのか分からぬ」「職業の選択肢がたくさんあるので、迷ってしまう」、『相談希求』は「自分一人で何かを決めた経験が少ないので、誰かにアドバイスを求めたい」「将来の職業について、誰かと相談をしたい」、『逃避』は、「将来のことは分からぬから、職業のことは考えたくない」「将来の職業については、考える意欲が全くわからない」、『モラトリアム』は、「就職しないでいつまでも今の状態でいられたらいいのにと思う」「職業のことなど考えずに、自分の好きなことに集中していたい」などの項目からなっている（詳細は、清水・花井（2007, 2008）を参照）。

今回の調査では、かなりの欠損反応がみられた。縦断的に分析することができるデータを確保するために、欠損反応には、EM 法（岩崎, 2002 参照）による推定を行った。この方法を適用したのは、各尺度の項目数のうち、半数未満の項目で欠損がみられた場合にのみとし、欠損が多い標本については、分析から除外した。

心理決定状況での群分け：将来の進路について 3 つの選択肢（「進学」「就職」「未定」）への回答を 3 回の各調査で求めた。清水・坂柳（1988）のように、1 年次の心理決定状況を基に、2 年次での回答を組み合わせて、キャリアの決定状況の変化パターンを分類することにした。これらの進路選択についての群と 3 回の測定機会である学年を独立変数とし、自己効力感と意思決定とを従属変数とした 2 要因の反復測定分散分析を行った。

以上の分析には、IBM SPSS Statistics 19 を用いた。

2. 結果

3回の測定機会での下位尺度の信頼性と統計量を表1に示す。尺度の信頼性は、自己効力感では .80(目標選択, 1年次)から .90(計画立案, 2・3年次)で、意思決定では .76(障害不安, 1年次)から .90(モラトリアム, 3年次)であり、いずれの測定機会でも十分に高いレベルの値を得ることができた。1年次から3年次にかけて希望する進路選択パターンを示したものが表2である。ここでは、1年次の就職・進学の進路選択と1, 2年次での未決定に着目し、5つの群にわけた。1年次で進学を選択し、その後、2年次・3年次で未決定とはならずに進学か就職を選択した「進学」群、1年次に就職を選択し、その後も進学か就職を選択した「就職」群、1年次でのみ未決定であった「1未定」群、2年次で未決定に一時変わった「2未定」群、1・2年次とも

未決定と回答した「両未定」群とした。

選択自己効力感と意思決定の1年次から3年次までの進路選択パターンの5群の縦断的変化をみると、尺度の平均と標準偏差を表3と表4に掲載した。まず、各表の計の列の平均と標準偏差から、3年間での全体(N=286)の変化をみてみると、自己効力感の各尺度の得点は学年とともに上昇する傾向を示している。キャリア意思決定の尺度では、全体的に不決断傾向が学年とともに弱くなる傾向を示しているが、『障害不安』の尺度だけが3年次になって高くなる。

次に、進路選択パターン群による3年間での変化の様相を検討するために、各尺度別に反復測定の分散分析を適用した。この分析では、学年と進路選択パターン群の主効果とそれらの交互作用について検討した。その結果が表5と表6である。

表1 3回の測定機会での下位尺度の信頼性と統計量(N=286)

尺度	1年次			2年次			3年次			
	α 係数	平均値	SD	α 係数	平均値	SD	α 係数	平均値	SD	
自己効力選択	自己評価	0.83	2.63	0.64	0.87	2.60	0.66	0.87	2.74	0.63
	目標選択	0.80	2.56	0.61	0.85	2.53	0.61	0.89	2.77	0.63
	計画立案	0.84	2.26	0.62	0.90	2.32	0.64	0.90	2.59	0.67
	情報収集	0.79	2.43	0.63	0.85	2.49	0.64	0.86	2.76	0.64
	意思決定の主体性度	0.87	2.72	0.67	0.87	2.81	0.64	0.87	3.05	0.66
キャリア意思決定	不決断	0.88	2.47	0.79	0.89	2.53	0.77	0.86	2.08	0.68
	決定不安	0.82	2.60	0.68	0.84	2.64	0.71	0.85	2.54	0.74
	障害不安	0.76	2.54	0.65	0.80	2.54	0.63	0.82	2.74	0.67
	葛藤	0.82	2.29	0.67	0.86	2.33	0.72	0.86	2.01	0.67
	相談希求	0.86	2.47	0.76	0.89	2.53	0.70	0.88	2.57	0.74
	逃避	0.79	2.21	0.67	0.81	2.11	0.63	0.81	1.88	0.66
	モラトリアム	0.85	2.13	0.81	0.89	2.08	0.86	0.90	2.18	0.93

注：すべての尺度得点は、項目数の5で除している。

表2 1年次から3年次にかけての進路選択パターンによる分類

1年次 進路選択	2年次 進路選択	3年次 進学	3年次 就職	N	%	進路選択群 (略号)
進学	進学	14	3	22	7.7	1年次進学希望 (進学)
	就職	1	4			
就職	進学	7	6	181	63.3	1年次就職希望 (就職)
	就職	12	156			
未定	進学	3	3	39	13.6	1年次未定 (1未定)
	就職	5	28			
進学 就職	未定	3	5	21	7.3	2年次未定 (2未定)
	就職	4	9			
未定	未定	5	18	23	8.1	1・2年次未定 (両未定)
		54	232	286	100	

表3 進路選択による自己効力感の3年間の尺度得点の変化(N=286)

進路選択群 (N)	進学 (22)		就職 (181)		1未定 (39)		2未定 (21)		両未定 (23)		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
自己評価	1年次	2.78	0.69	2.65	0.62	2.69	0.59	2.43	0.60	2.59	0.76
	2年次	2.78	0.67	2.64	0.62	2.42	0.60	2.43	0.73	2.60	0.87
	3年次	2.87	0.75	2.77	0.64	2.49	0.53	2.69	0.48	2.66	0.67
目標選択	1年次	2.93	0.56	2.59	0.59	2.62	0.55	2.32	0.53	2.37	0.76
	2年次	2.86	0.69	2.58	0.58	2.41	0.61	2.33	0.57	2.32	0.67
	3年次	3.02	0.80	2.82	0.62	2.59	0.56	2.61	0.60	2.62	0.63
計画立案	1年次	2.50	0.61	2.29	0.61	2.29	0.66	1.98	0.42	2.21	0.77
	2年次	2.50	0.68	2.35	0.61	2.35	0.59	2.21	0.67	2.04	0.72
	3年次	2.81	0.80	2.63	0.68	2.50	0.56	2.40	0.68	2.53	0.56
情報収集	1年次	2.88	0.67	2.40	0.58	2.55	0.59	2.19	0.63	2.51	0.75
	2年次	2.84	0.79	2.50	0.57	2.54	0.55	2.30	0.72	2.34	0.83
	3年次	3.05	0.74	2.79	0.59	2.60	0.55	2.64	0.76	2.62	0.71
意思決定の主体性度	1年次	3.14	0.57	2.70	0.68	2.56	0.53	2.75	0.65	2.68	0.78
	2年次	3.29	0.64	2.75	0.62	2.79	0.59	2.81	0.52	2.77	0.81
	3年次	3.16	0.81	3.07	0.64	3.04	0.67	2.80	0.64	3.03	0.61

表4 進路選択による意思決定の3年間の尺度得点の変化(N=286)

進路選択群 (N)	進学 (22)		就職 (181)		1未定 (39)		2未定 (21)		両未定 (23)		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
不決断	1年次	2.02	0.92	2.40	0.75	2.52	0.57	2.65	0.81	3.05	0.73
	2年次	2.15	0.91	2.49	0.75	2.60	0.65	2.65	0.80	2.89	0.62
	3年次	1.98	0.70	2.01	0.66	2.32	0.69	2.19	0.75	2.30	0.64
決定不安	1年次	2.38	0.87	2.56	0.65	2.69	0.40	2.56	0.75	3.05	0.62
	2年次	2.39	0.89	2.66	0.68	2.68	0.52	2.52	0.85	2.92	0.56
	3年次	2.26	0.75	2.51	0.74	2.80	0.63	2.47	0.79	2.88	0.58
障害不安	1年次	2.58	0.84	2.55	0.64	2.60	0.48	2.41	0.67	2.62	0.68
	2年次	2.52	0.60	2.55	0.62	2.43	0.53	2.52	0.79	2.53	0.61
	3年次	2.39	0.73	2.76	0.69	2.86	0.50	2.74	0.68	2.86	0.51
葛藤	1年次	2.14	0.85	2.24	0.65	2.44	0.52	2.41	0.68	2.47	0.74
	2年次	2.00	0.70	2.32	0.67	2.54	0.63	2.35	0.85	2.46	0.85
	3年次	2.05	0.75	1.96	0.63	2.15	0.62	2.06	0.77	2.17	0.74
相談希求	1年次	2.42	0.93	2.46	0.72	2.67	0.72	2.31	0.71	2.70	0.99
	2年次	2.35	0.68	2.53	0.68	2.69	0.58	2.46	0.81	2.71	0.75
	3年次	2.40	0.82	2.60	0.75	2.71	0.65	2.48	0.67	2.54	0.75
逃避	1年次	1.75	0.65	2.14	0.60	2.28	0.55	2.53	0.64	2.68	0.85
	2年次	1.73	0.53	2.06	0.60	2.22	0.54	2.24	0.57	2.54	0.84
	3年次	1.84	0.68	1.84	0.66	1.90	0.68	1.96	0.60	2.15	0.64
モラトリアム	1年次	2.12	0.79	2.09	0.80	2.17	0.77	2.06	0.75	2.50	0.99
	2年次	1.92	0.95	2.09	0.84	2.12	0.77	1.93	0.92	2.35	0.88
	3年次	2.32	0.97	2.08	0.91	2.42	0.93	2.12	0.94	2.68	0.95

表5 自己効力感の反復測定分散分析の結果(学年×進路選択群)

	学年		進路選択群	交互作用	
	F(2, 562)	多重比較			F(8, 562)
自己評価	2.54	上 1,2<3年次	1.71		0.94
目標選択	10.213 ***	1,2<3年次	5.42 *** 進>2未(上), 両未, 1未, 就>1未		0.62
計画立案	21.144 ***	1,2<3年次	2.91 * 進>1未		0.90
情報収集	15.465 ***	1,2<3年次	3.90 ** 進>就, 両未(上), 1未		1.85 上
意思決定の主体性度	11.829 ***	1,2<3年次	2.50 * 進>就, 1未(上)		2.34 *

注：有意水準は次のように表示した。*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, 上 p < .10

主効果が有意であった場合には Tukey 法による多重比較をおこなった。

結果では、進-進学, 就-就職, 1未-1年次未定, 2未-2年次未定, 両未-両年次未定と略している。

表6 意思決定の反復測定分散分析の結果（学年×進路選択群）

	学年		進路選択群		交互作用 <i>F</i> (8, 562)
	<i>F</i> (2, 562)	多重比較	<i>F</i> (4, 281)	多重比較	
不決断	22.71 ***	1,2>3年次	5.54 ***	進,就<両未, 進<1未	1.47
決定不安	0.71		3.73 **	進,就,1未<両未	0.73
障害不安	7.23 **	3>1,2年次	0.49		1.51
葛藤	12.34 ***	1,2>3年次	1.78		0.86
相談希求	0.23		1.22		0.77
逃避	19.73 ***	1, 2>3年次	7.14 ***	進,就<両未, 進<1未	2.30 *
モラトリアム	7.37 **	3>2年次	1.91		1.42

注：有意水準は次のように表示した。*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

主効果が有意であった場合には Tukey 法による多重比較をおこなった。

結果では、進・進学、就・就職、1未-1年次未定、2未-2年次未定、両未-両年次未定と略している。

学年による主効果は、全ての自己効力感にみられ、学年が上がるとともに自己効力感も上がっているパターンがとらえられた。図1、図2に図示した。『自己評価』では、1-2年次あまり変化がみられず、変化の傾向がみられるにとどまった。『目標選択』では、1-2年次で少し下がったが、2-3年次であがった。『計画立案』『情報収集』『意思決定の主体性度』については、学年とともに一貫して上がったが、2-3年次での上昇がより大きく、『意思決定の主体性度』の上昇は大きかった。

キャリア意思決定の変化では、1-2年次で少し上がる下位尺度もみられたが、有意とはならず、2-3年次での変化が大きかった。漠然とした決定困難さを示す『不決断』は2-3年次で大きく下がった。進路選択での迷いを示す『葛藤』は、『不決断』と似た変化を示し、2-3年次で下がった。決定することへの不安を示す『決定不安』と、進路についての相談を求める『相談希求』では、有意な変化はみられなかった。試験や面接への不安を示す『障害不安』は、2-3年次では、むしろ上がった。職業について考えたくないことを示す『逃避』については、学年とともに着実に下がったが、「今までいたい」や「好きなことをしていたい」という『モラトリアム』については、2-3年次で上がった。

進路選択群による主効果については、図3、図4に図示した。自己効力感では、『自己評価』を除く他の下位尺度でみられ、「進学」群と「1未定」群に差があった。『情報収集』と『意思決定の主体性度』では、「進学」群と「就職」群との間にも差がみられた。『目標選択』では、「進学」群が、全ての未定群である「1未定」群、「両未定」群、「2未定」群（傾向のみ）よりも高く、「就職」群も「1未定」群よりも高かった。キャリア意思決定では、『不決断』と『逃避』で「両未定」群が、「進学」群と「就職」群よりも高く、「1未定」群は「進学」群よりも高かった。『決定不安』においても、「両未定」群は「進学」群、「就職」群、さらに「1未定」群よりも高かった。

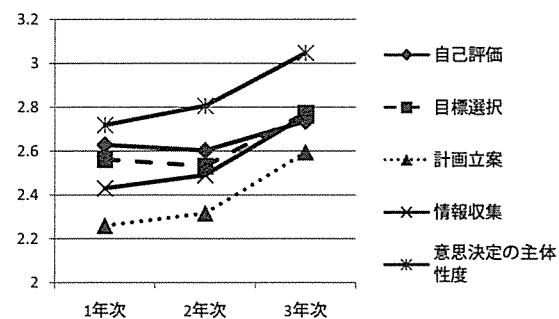


図1 自己効力感の3年次までの変化
(反復測定の分散分析結果 学年による主効果)

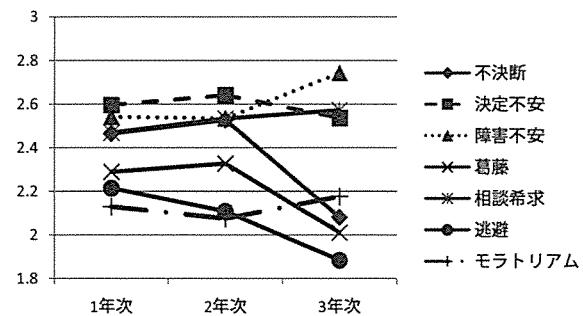


図2 意思決定の3年次までの変化
(反復測定の分散分析結果 学年による主効果)

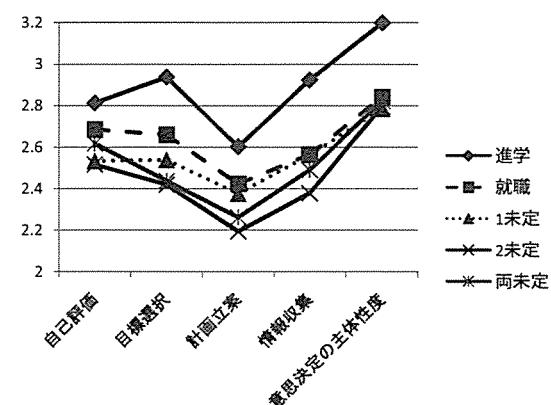


図3 反復測定分散分析結果
(自己効力感における主効果：進路選択群)

進路選択群と学年の交互作用では、『情報収集』に有意差の傾向が、『意思決定の主体性度』と『逃避』で5%水準の有意差がみられた。ここでは、『意思決定の主体性度』と『逃避』の結果を図5と図6に示す。『意思決定の主体性度』では、全ての年次で「進学」群が高く推移した。1年次、2年次で「進学」群は、「就職」群と「1未定」群よりも高かったが、2年次では、「進学」群は、さらに、「両未定」群よりも高い傾向がみられた。『逃避』では、全ての年次で「進学」群が低く推移し、1年次では、「進学」群と他のすべての群と差あるいは差の傾向がみられ、低かった。2年次になると「就職」群も逃避傾向は減少し、「進学」群との差は少なくなくなったが、3つの未定群は依然、「進学」群よりも高い進路選択からの逃避がみられた。そして、「両未定」群も「就職」群よりも高い逃避がみられた。

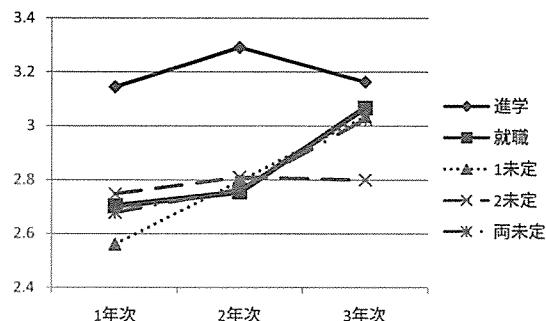


図5 反復測定の分散分析結果（学年×進路群）
交互作用：意思決定の主体性度

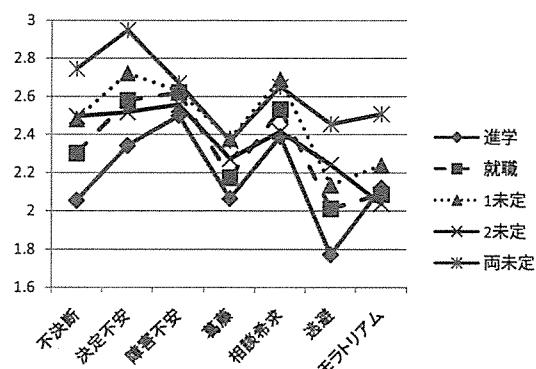


図4 反復測定分散分析結果
(意思決定における主効果：進路選択群)

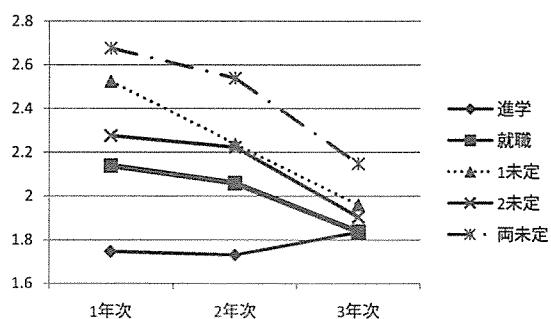


図6 反復測定の分散分析結果（学年×進路群）
交互作用：逃避

3. 考察

本研究では、工業高校の1年次での進学・就職・未決定の進路選択パターンとキャリア発達との関連を、3年次までの縦断的調査から検討した。本工業高校生の回答では、3年次の初めには、未決定のままの生徒はほとんどみられず、進学か就職かの選択を行っていた。2年次・3年次で進路変更をする生徒もみられたが、1年次の進路選択により5群に分けた。本研究では、未決定者に着目し、1年次、2年次、両方の3つの未定群を分けて取り出した。これにより、「就職」群に人数が偏り、他の群の人数が少なくなったが、5つの群のキャリアに関する自己効力感や意思決定の3年間での変化の様相についてはとらえることができた。

全体的な変化の様相としては、1-2年次での変化は小さく、変化は2-3年次でおきているといえた。このことは、1-2年次での様々な支援の効果はすぐに期待できないことを示しているが、2-3年次であらわれるように

なるといえる。自己効力感については、連続して上るとはいえず、『自己評価』と『目標選択』はともに、2年次で一度少し下がる変化の傾向がみられた。意思決定の『不決断』と『葛藤』についても、1-2年次で少し上がり、2-3年次に下がったことから、1-2年次は自己と向き合うことで迷いや漠然とした不安が増す時といえよう。『決定不安』も1-2年次で上がっているが、2-3年次であまり下がらず、進路を決める選択への不安が示された。『計画立案』と『情報収集』は、1-2年次での上昇よりも、2-3年次で大きく上がるというよく似た変化の傾向を示した。『障害不安』や『モラトリアム』では、2-3年次に上がったことから、キャリア意思決定の下位尺度がすべて低くなるということではないといえた。『相談希求』では、有意になるほど差はないが、同様の上昇が少しみられた。『障害不安』や『相談希求』は進路選択の意思決定が近づくと上昇し、支援の必要な時であることを示している。このような様相は、横

断的データからでは、とらえることも解釈も難しいが、個々の生徒を縦断的に追跡することによって変化の様相を明確にとらえることができた。

また、『意思決定の主体性度』は、1年次から継続して上がり、『逃避』は逆に継続して下がった。これは、現実感を持って1年次から進路選択と向き合っていると思われ、就職と身近な技術の教育を行っている工業高校の生徒に期待された変化であろう。工業高校では、専門的な学習も1年次から導入されており、全体的にみて、1年次から進路選択についての意思決定をし、職業について具体的に考える方向にあるという結果が得られたことは、専門性を高めるうえで、好ましいことと思われる。

進路選択の5群の違いでは、「進学」群とほかの群との間で大きな違いがみられた。未決定の群では、「1未定」群、「両未定」群と「進学」群との差が有意となったが、「2未定」群については、人数が少ないことが影響したためか、有意とはならなかった。

進路選択群と学年の交互作用についてみると、特徴ある変化のパターンが得られた。『逃避』と『意思決定の主体性度』からみると1年次での群間差は大きいといえた。1年次から「進学」群は『意思決定の主体性度』が高く、『逃避』は低く推移し、1年次から将来働くことを考えているとみられる。「就職」群は、『意思決定の主体性度』では、2年次まで、「進学」群よりも低く、未定群と似たパターンを示したが、『逃避』では、2年次で差がなくなったことから、主体的に進路選択を取り組む自信は低いが、働くことを考え始めているとみられる。未定群については、3群とも2年次まで『逃避』は高いが、「両未定」群では最も高く推移していることから、未決定が続く生徒には、進路選択への個別の支援が必要であると思われる。「1未定」群は、1年次の『意思決定の主体性度』は最も低く、2年次からは未定ではなくになっているのだが、「両未定」群と似たパターンを示し、2年次においても主体的な進路選択への取り組みが低く、働くことを考えることから逃げているとみられる。しかし、いずれの群も2-3年次に大きく変化し、3年次では「進学」群と差がなくなっている。専門高校での指導の手厚さといった特徴といえるのかもしれない。その中で、「2未定」群では、3年次においても『意思決定の主体性度』が有意ではないが低いままであるのが気になるところである。1年次では未決定でなく、2年次に未決定となる生徒は、何らかの躊躇があるのかもしれない。

以上をまとめると、1年次から進学を意識している

生徒は、その後のキャリア発達が進んでいるといえる。就職を1年次で選択すると、2年次になって、ようやく仕事を主体的に意識し始め、2-3年次で急速にキャリア発達がなされるといえる。未決定を1度でも考えた生徒は、3年次で他と差がない程度に発達はしているが、未決定が長引く生徒は漠然とした不安や決められないという不安を抱えており、個別の支援を必要としていると思われる。

総合的にみると、3年間にわたり縦断的にみていくことで、自己効力や意思決定の下位尺度の変化に特徴がみられ、調査対象の工業高校の平均的なキャリア発達が2つの尺度の指標により、とらえられたといえよう。さらに、1年次の進路選択により群に分けてみると、1年次からの選択の違いによる発達は2年次まで影響していることが見受けられるため、1年次での進路選択を念頭に入れての支援が効果的なのではないかといえる。しかし、いずれの群にも、フリーターになる可能性はあるかという質問に肯定的に回答した生徒は存在しており、各群内の変化にもばらつきを内包している。キャリア発達の支援は個別的なものであり、1年次の進路選択や未決定の継続状況に加え、フリーターになる可能性があると思うか等の回答も考慮しながら、一人一人のキャリア発達をとらえつつ支援していくことが大切であろう。早めに希望の進路を把握することで、不本意入学の生徒へのキャリア発達への支援ができる、また、未決定が続く生徒の中途退学や安易な進路選択を防ぐための支援が出来るのではないかと思われる。

就職を選択する生徒が多いことに加えて、進路選択のパターン分類を3回の測定に適用したこともあり、人数の偏りは非常に大きくなかった。このため、本研究では、少ない人数の群もあり、群によつては人数に偏りが出たため、分散分析を用いざるを得なかった。最新の縦断的な解析方法論（例えば、清水, 2011; 清水・三保・紺田・花井・山本, 2011など）によって変化の様相を追求することも今後の課題である。

引用文献

- 藤原 翔 2010 進路多様校における進路希望の変容—学科、性別、成績、階層による進路分化は進むのか— 中村高康（編著）進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチー ミネルヴァ書房 pp.44-73.
- 花井洋子 2007 キャリア自己効力感のモデル化—大学生を対象として— 関西大学大学院『人間科学』,

- 67, 73-87.
- 花井洋子 2008 キャリア選択自己効力感尺度の構成
関西大学大学院『人間科学』, 69, 41-60.
- 花井洋子 2011 工業高校生のキャリア形成支援の検討
—自己効力感と意思決定の変化から— 関西大学
大学院『人間科学』, 74, 95-113.
- 花井洋子・清水和秋 2009 キャリア選択自己効力感
の縦断的変化の検討—キャリア意思決定との関連か
ら— 日本教育心理学会 第51回総会発表論文集, 324.
- 花井洋子・清水和秋・宮坂吉有樹・松下眞治 2009
工業高校生を対象にしたキャリア発達の検討—潜在
差得点モデルによる2回の測定の変化から— 日本
キャリア教育学会第31回研究大会発表論文集, 71-
72.
- 本田由紀 2009 専門高校生の職業への移行 小杉
礼子(編著) 若者の働きかた ミネルヴァ書房
pp.46-68.
- 岩崎 学 2002 不完全データの統計解析 エコノミ
スト社.
- 岩田 考 2010 進路未定とフリーター 中村高康
(編著) 進路選択の過程と構造—高校入学から卒業
までの量的・質的アプローチー ミネルヴァ書房
pp.184-208.
- 苅谷剛彦・濱中義隆・大島真夫・林 未央・千葉勝吾
2003 大都市圏高校生の進路意識と行動—普通
科・進路多様校での生徒調査をもとに— 東京大学
大学院教育学研究科紀要, 42, 33-63.
- 望月由紀 2007 進路形成に対する「在り方生き方指
導」の功罪 東信堂.
- 長須正明 1994 高校生の進路選択における不決断の
研究 立正大学哲学・心理学会紀要, 20, 1-20.
- 中村高康 2008 大学入学者選抜の変容—推薦入学・
AO入試の拡大を中心として— IDE, 506, 23-27.
- 日本キャリア教育学会(編) 2008 キャリア教育概説
東洋館出版社.
- 大谷哲朗 2003 高校生の進路選択自己効力感が学校適
応感に及ぼす影響 比治山大学現代文化学部紀要,
10, 147-154.
- 酒井 朗 2007 進路選択への支援の必要性 酒井 朗編
進学支援の教育臨床社会学—商業高校におけるア
クションリサーチー 効草書房 pp. 1-21.
- 清水和秋 1983 職業的意思決定と不決断 関西大学
社会学部紀要, 14(2), 203-222.
- 清水和秋 2011 専門高校でのキャリア教育の介入効果
とその定着の解析—6回のキャリア縦断調査から—
職業とキャリアの教育学, 18, 11-16.
- 清水和秋・花井洋子 2007 キャリア意思決定尺度の開
発—その1:大学生を対象とした探索的因子分析か
らの尺度構成— 関西大学社会学部紀要, 38(3), 97-
118.
- 清水和秋・花井洋子 2008 キャリア意思決定の安定
性と変化そして不安との関連—大学1・2年生を対象
とした半年間隔での縦断調査から— キャリア教育
研究, 26(1), 19-30.
- 清水和秋・三保紀裕・紺田広明・花井洋子・山本理恵
2011 心理的変化のモデル化—3回の縦断データ
を対象とした潜在差得点モデル— 関西大学心理学研
究, 2, 19-28.
- 清水和秋・坂柳恒夫 1988 進路不決断と進路成熟—
父親、母親、友人、教師の影響に関する高校生の横
断的な研究— 進路指導研究, 9, 28-36.
- 寺田盛紀 2009 日本の職業教育—比較と移行の視点
に基づく職業教育学— 晃洋書房.
- 富永美佐子 2008 進路選択自己効力に関する研究の現
状と課題 キャリア教育研究, 25(2), 97-111.
- 浦上昌則 1993 進路選択に対する自己効力と進路成熟
の関連 教育心理学研究, 41(3), 358-364.
- 浦上昌則 1995 女子短期大学生の進路選択に対する
自己効力感と職業不決断 進路指導研究, 16, 40-45.